

同志社大学英語英文学研究会 1978年度発表要旨

大泉昭夫・今関恒夫編

第五回研究会

10月23日(月)14時30分～16時

同志社大学入学試験における英語テストの予備調査

北 尾 謙 治

二つのローマ史劇における Play-Metaphor をめぐって

井 川 ふ く

Ann Richter はその著 *Shakespeare and the Idea of Play* において、後期悲劇における play-metaphor が、もっぱら演劇の空しさ、虚妄性を表わすことを指摘し、この時期を Cheapening the Stage の時代としてまとめている。実際この時期の作品、*Timon of Athens*, *Coriolanus*, *Antony and Cleopatra* においては、play は dissembling に等しく、偽りと恥の行為として語られる。しかしこの事をそのまま、作者の“演劇観”と見做すことはどうであろうか。劇中人物は彼が本来あるべき姿“identity”と、彼に課せられた“role”との齟齬、矛盾に苦しみ、その分裂した状況を play-image に託して語るのである。従って人物の性格、状況によって、play-image の内包するものにも微妙な相異、変化がみとめられよう。二つのローマ史劇に際立って多い演劇に関する imagery に即して、二作の特徴に触れてみたい。

第六回研究会

12月4日(月)14時30分～16時

1950年代のアメリカ小説に描かれた都市と郊外の生活

——John Cheever の作品を中心に——

岩 山 太 次 郎

第二次大戦後、アメリカ社会は、それまでに例をみなかったような繁栄をとげ、いわゆる「豊かな社会」の様相を呈していたし、多くの人々は、そういう社会に「適合」しようとしていた。人口の都市集中化や急速に開発されはじめた郊外居住地に住居を求めようとした傾向は、1950年代のそういう物質的繁栄をよく表わしているものである。

しかし、1950年代の都市や郊外居住地の生活を描いた1950年代に書かれたいくつかの小説をみると、物質的繁栄の中での生活は必ずしも生活の内面的な「豊かさ」に通じるものではなく、個人個人の存在をおびやかすものだという見方がうかがえる。これは Riesman, Miles, Whyte などの分析・批判にみられるものと軌を一にするものである。

この報告では、1950年代は “comfort” と “conformity” の時代であるとよくいわれるが、小説に描かれた都市と郊外の生活をみると、“discomfort” と “inconformity” の時代であった、ということを考えてみたい。

The Iceman Cometh における二つのエピソードをめぐって

近 田 小 一

The Iceman Cometh (1939) は *Long Day's Journey into Night* (1941) と共に Eugene O'Neill (1888—1953) の円熟期の作風を示す、最重要な作

品とされているが、その作品に二つの、女性にまつわるエピソードが収められている。一つは Hickey (*The Iceman*) の妻殺しの告白であり、他は Parritt があらわにする母に対する裏切りである。これらはともに劇構成の枢要な部分となっているが、同時に作者自身の個人的な、内部の世界に、その源泉を求めることができる。

Long Day's Journey into Night が O'Neill の数ある作品中でもっとも自伝的な色彩が強いとされているが、私たちの観察で *The Iceman Cometh* もそれに劣らず——ある面ではむしろより以上にあらわに——自伝的であることを明らかにできよう。そして他の作品、例えば *Mourning Becomes Electra* (1931) 等とこれらを照応するとき、O'Neill 劇の世界の核心的な要素である女性像の創造について、さらに興味深い考察が可能となるであろう。